

ゴージャスお宝鑑定家〜「うん、ゴージャス！」36

登場人物

- 剛田(50代前半)：剛田質店の店主。ゴージャスな品物しか鑑定しない。優雅で独特の価値観を持つ。口癖は「ゴージャス！」。
- 白金(20代後半)：剛田質店の見習い鑑定士。常識人で神経質。剛田の奇抜な行動に振り回される。
- 貴婦人：ルビー製乳母車の持ち主。上品で少し天然。
- 謎の男：怪しい品物を持ち込むが、剛田に蹴される。
- 配達員：乳母車を運び込む際に登場する脇役。

シーン1：剛田質店の朝

場所：剛田

（白金が脚立に乗ってシャンデリアを掃除している。剛田はソファに優雅に腰掛け、紅茶を飲みながら詩集を朗読している。）

白金（ぼやきながら）…店長、お願いですから、このシャンデリア、もう少し小さいのにしてくださいませんか？これ、掃除するだけで一日が終わりますよ…。

剛田（詩的に）…白金君、ゴージャスたるもの、輝きと壮麗さを失ってはならないのだよ。シャンデリアは店の魂だ。掃除とは、魂を磨く行為でもある。

白金（ため息）…魂ですか…。僕の体力が削られていく魂です…ね。

（そこに配達員が現れ、大きな荷物を運び込む。）

配達員…剛田さん宛ての荷物です。なんでも特注のゴージャスな什器…とか…。

剛田（立ち上がり、優雅に受け取る）…おお、ついに届いたか！開封の儀を始めようではないか！

（剛田が箱を開けると、中から金箔で装飾された巨大な宝石ケースが現れる。）

白金（驚愕して）…またですか！？これ、店のスペース取るだけじゃないですか！

剛田（満足げに）…白金君、ゴージャスとは広さではない。存在そのものが空間を支配するのだよ。

シーン2：貴婦人の訪問

場所…剛田質店のカウンター。

（店のベルが鳴り、貴婦人が優雅に入店。手には布で覆われた品物。）

貴婦人（微笑みながら）…ごきげんよう、剛田先生。このたび、ぜひ先生に鑑定していただきたいものがあります…。

剛田（優雅にお辞儀して）…ごきげんよう、マダム。どうぞおかけください。ゴージャスな品をお持ちいただいたとお見受けします。

白金（小声で）…また始まった…。

（貴婦人が布を外すと、ルビー製の乳母車が現れる。）

白金（驚愕して）…な、なんですかこれ！？乳母車がルビーでできてる…？

剛田（目を輝かせて）…うん、ゴージャス！これぞ真の芸術品！ルビーの輝きがまるで星々の舞踏会のようなだ！

白金（困惑し

貴婦人（誇らしげに）…これは私の曾祖母が愛用していたものです。ルビーと金で装飾され、百年以上の歴史がこざいます。

剛田（目を閉じ、深呼吸して）…歴史と芸術が融合したこの輝き…。これはただの乳母車ではない。まさに、ゴージャスの極みだ！

シーン 3：剛田、石言葉を熱弁

場所 鑑

（剛田が白手袋をはめ、乳母車をじっくり観察。白金がノートを持って記録。）

剛田…ルビー…それは情熱、愛、そして高貴さを象徴する

石だ。古代インドでは「宝石の王」とされ、持ち主に永遠の

富と幸福をもたらすと信じられていた。

白金（ぼそりと）…でも、乳母車にする必要ありましたか

ね…。

剛田（無視して）…さらに、このカットを見たまえ！これは16世紀フランスの名工、ジャン＝ルイ・ルマルルの手によるものだ！彼の作品は、ただの装飾品ではない。魂を込めた

芸術だ！

白金（皮肉っぽく）…魂が重すぎて動かないんですよ…。

剛田（熱弁を続ける）…白金君、ゴージャスとは重さではない。存在そのものが心を揺さぶるのだ！

シーン々…実際に使ってみる

場所…剛田質店の店内

（剛田が乳母車をじっくり見つめている。白金は不安げな表情でそれを見守る。）

剛田（突然閃いたように）…白金君！ゴージャスな品というものは、ただ飾るだけではその真価がわからない。実際に使ってみてこそ、その本質が見えるのだ！

白金（眉をひそめて）…使うて…まさか、店長、その乳母車に乗るつもりじゃ…。

剛田（堂々と宣言して）…その通りだ！このルビー乳母車に身を委ね、その価値を体感してみる！

白金（慌てて手を振りながら）…ちよ、ちよっと待ってください

い！それ、百年以上前のアンティークですよ！？壊れたらどうするんですか！？

（剛田は白金の制止を無視し、スーツの裾を軽く持ち上げると、ゆっくりと乳母車に近づく。乳母車のルビーが光を反射してキラキラと輝く。）

剛田（乳母車を愛おしそうに撫でながら）…見たまえ、この輝き！ルビーの赤は情熱、金のフレームは高貴さを象徴している。この美しさを体感せずして、どうしてその価値を語れようか！

白金（呆れながら）…いや、語らなくていいですってば…。

（剛田が慎重に乳母車の中に足を入れる。乳母車はギシギシと音を立て、明らかに耐久限界に近づいている。）

白金（声を荒げて）…店長！絶対無理ですよ！やめてください！それ、壊れますって！

剛田（片足をなんとか押し込んで）…うむ、少々窮屈だが…この感覚、忘れていた童心を思い出すようだ。

白金（青ざめながら）…童心どころか、壊れる寸前ですよ！音が危ないって聞こえませんか！？

（剛田がさらに体を押し込もうとするが、乳母車のフレームがきしみ、ルビーがカラカラと小さな音を立てる。白金が慌てて駆け寄る。）

白金（半ば叫びながら）…ちょっと！ルビーが外れそうですよ！本当にやめてくださいってば！

剛田（屈託のない笑顔で）…白金君、ゴージャスとは挑戦だ。新しい価値観を創造する行為そのものがゴージャスなのだよ！

白金（怒鳴りながら）…そんな哲学、今はどうでもいいです！降りてください！

（剛田がようやく乳母車から足を抜くが、スーツの裾が引っかけかり、軽くバランスを崩す。白金が慌てて支える。）

剛田（微笑みながらスーツを直して）…ふむ、確かに。ゴージャスな品は、観賞することでこそ真価が発揮されるのかもしれないな。

白金（肩を落としながら）…最初からそうしてくださいよ…。

（剛田が乳母車を元の位置に戻し、そっと埃を払う仕事をすする。その後、満足げに乳母車を眺める。）

剛田（感慨深げに）…だが、この乳母車に触れたことで、私は確信した。この品はただのアンティークではない。歴史と芸術、そして人間の夢と情熱が詰まった、まさにゴージャ

スの結晶だ！

白金（ぼそりと）…その夢と情熱で乳母車が壊れなくてよかったですよ…。

（カメラが乳母車をズームアップ。ルビーの輝きが店内の光を反射し、美しく煌めく。）

シーン5：謎の男の登場

（店に怪しい男が現れ、奇妙な形の金属の塊を持ち込む。）

謎の男…これ、鑑定してくれ。高価なはずだ…。

剛田（一瞥して）…これは…ゴージャスではない。

謎の男…いやいや、重いし、金属だし、高そうだろ？

剛田（断固として）…ゴージャスとは、単なる値段や重さで

はない。美しさと優雅さが魂に響くものだけがゴージャスなのだ！

白金（小声で）…また始まった…。

シーンの9：エンディング

場所…剛田質店の店内

（店内の中央に乳母車が置かれている。剛田が乳母車を飾る位置を調整しながら、満足げに頷いている。）

剛田（感慨深く）白金君、見たまえ。この乳母車が店の中心に据えられることで、我が剛田質店はさらなる輝きを得た。これぞゴージャスの極みだ！

白金（疲れた表情で）…店長、確かにゴージャスですけど、これ、スペース取りすぎじゃないですか？他の品物が全然置けませんよ。

剛田（優雅に手を振りながら）…白金君、ゴージャスな品と
いうものは、他を圧倒し、空間そのものを支配するのだ。む
しろ、他の品物が霞むのを防ぐためにも、これでいいのだ
よ。

白金（ぼそりと）…いや、もう霞むどころか消えてますけど…。

（剛田は乳母車のルビーを指で軽く撫で、満足げに微笑
む。）

剛田…この輝き…まるで星々が奏でる交響曲のようだ。ル
ビーの赤は情熱、金のフレームは高貴さを象徴している。
これこそ、歴史と芸術が融合したゴージャスの結晶だ！

白金（苦笑しながら）…また始まった…。

（剛田が突然、店内を見渡しながら立ち上がる。）

剛田…白金君、これからも我が店には、さらにゴージャスな
お宝が舞い込んでくるだろう。準備はいいかね？

白金（ため息をつきながら）…準備も何も、店長のテンシヨ
ンについていくのが精一杯ですよ…。

（剛田が胸を張り、堂々とした声で宣言する。）

剛田 …ゴージャスたるもの、常に優雅たれ！さあ、次なるお宝を迎える準備を始めようではないか！

白金 (小声で)…次のお宝が来る前に、まずこの乳母車をどうかしてほしいんですけどね…。

(カメラが乳母車をズームアップ。ルビーの輝きが店内の光を反射して煌めく。)

剛田 (声だけで)…うん、ゴージャス！

(画面がフェードアウトし、エンドクレジット入。)